

〔思い出の舞台〕

「ナンシー国際演劇祭」の頃

塩谷 敬

私がフランス東部の都市ナンシーの「演劇教育・研究国際大学センター」（通称 CUIFERD）に留学したのは1972年10月であった。この話を進めるには前年7月のジャック・ラング氏との出会いにまで遡らねばならない。

1971年7月、私はその秋に行われる仏政府給費留学生試験の準備をしていた。

指導教授の戸張智雄先生から「夏に初来日する演劇関係者の世話係をしてもらいたい」というお話をいただき、軽い気持ちでお引き受けしたのだが、これが私の一生を左右するほどの出来事になろうとは想像さえもしなかった。ラング氏は後にミッテラン政権の文化大臣として辣腕を振るうことになるが、彼の原点はナンシー大学在学中の1963年に妻モニックらと創立した「ナンシー・大学劇場」にあるのでその経過を簡単に記しておこう。

大学都市の住民と演劇との交流を通して文化の潮流を創り出すという意図のもとに大学関係者及び自治体の支持を得て、ラングたちの組織は他大学の劇団との競演による「学生演劇・国際ディオニソス祭」を企画した。記念すべき第一回演劇祭は1963年4月24日から30日まで、古代ギリシアのディオニソス祭を模したコンクール形式で、ヨーロッパの8ヶ国11劇団が参加して開催された。

この演劇祭運動は、公的な文化組織の活動に対応したものであることが早い時期に証明される。つまり、行政側も都市の活性化に至るものという認識でこの運動にかなりの期待を寄せていたのである。

1964年の演劇祭には、祖国ポーランドでも知名度が低かったグロトフスキーを初めて異国に紹介、彼の斬新な演劇論・俳優論は60年代後半から70年代の世界の演劇に大きな影響を与えるこ

とになる。

1965年、新しい演劇教育を目的とした冒頭のCUIFERDを演劇祭の付属機関として設立。外務省の特別予算枠で外国から演劇人5名を留学生として招き、交流を促す一方で彼らに「アトリエ」と称した演劇の実践講座を主宰させ、地域住民に無料公開した。

1966年にはアヴィニオン演劇祭の創始者で前「国立民衆劇場」総支配人ジャン・ヴィラルを総裁に、作家ミッシェル・ビュートルを審査委員長に迎え（実行委員長は初回からジャック・ラング）、この催しの存在意義を大々的にアピールしている。

1968年にフランス全土を揺るがした「五月革命」の数日前に開催された演劇祭は、その名称を「ナンシー国際演劇祭」に変更した。大学や社会の変革を求め火山の如く噴火する学生運動を前にして、学生演劇祭が、平凡な起爆剤で終わってしまうことを危惧したラングの措置であった。以後の演劇祭はコンクール形式を取らずに、アヴァンギャルドを中心にセミ・プロとプロの劇団の出会いの場として世界にその存在を知らしめることになる。中でもベトナム戦争を痛烈に批判したピーター・シューマン率いるアメリカの「パンと人形劇団」は路上で演じられ、演技空間の利用法に新たな発見を加えた。

1969年より、質の維持と十分な準備期間を設けるためにビヤンナーレ（隔年）開催とした。

1971年5月は、芸術的に最も実りの多い演劇祭となった。ポーランドのタディウス・カントール、アメリカのロバート・ウィルソンそして日本の寺山修司もナンシーから世界にデビューを果たした。結城人形座と青年座の合同劇団もこの年に参加している。

さて話を1971年7月の日本に戻そう。5月の演劇祭を大成功させた実行委員長ラングはその2ヶ月後、日本政府に招かれて妻モニックと初来日したのである。世話係の私は約一ヶ月間夫妻と行動を共にした。つたない仏語で会話を重ねるうちに彼らは私のプライベートな部分にまで興味を示して、「これから君は何をするつもりか」と尋ねてきた。「秋の留学生試験を演劇部門で受験します」と答えると、驚くべき返事が返ってきた。「君がチャレンジしようとしている留学生試験の最終審査まで進むことを条件に、もし不首尾に終わった場合は私の組織が君を留学生として迎えよう」と言ったのである。前述のように CUIFERD は外務省の特別枠で5名の外国人留学生を受け入れていた。私自身は大学に入学するまでの6年間を劇団文化座研究生などで演劇修行をした経験があるので、そこの留学生資格は満たしているとのことだった。

肝心の留学生試験は最終審査まで進んだものの演劇部門ではその年の該当者は誰もいなかった。

かくして私は1972年9月に CUIFERD の留学生としてナンシーの地を踏んだのである。ナンシーはパリの東306kmに位置する人口20万人、カトリック教会の重要都市であり、文芸アカデミーと大学を有する、主要都市の一つ。ガレヤドームに代表されるガラス工芸のアール・ヌーヴォーの発祥地として日本人にも良く知られている。さらに同市中心部の「スタニスラス広場」が1983年にユネスコの「文化遺産」に登録され、2005年にはTGVも開通し、今ではパリから90分で行けるようになった。北陸の金沢市とは1972年以来姉妹都市として交流が続いている。

演劇祭事務局は1973年5月の創立10周年記念祭に向けて準備に余念がなかった。我々留学生は昼間はナンシー大学大学院で演劇理論を学び、夜はそれぞれがアトリエを開いて地元の青少年と演劇活動に汗を流した。時間があると演劇祭事務局に顔を出して邪魔にならないように組織作りのノウハウを学んだものである。演劇祭の劇団選考システムは大変ユニークである。まず各国に滞在する、またはこれから滞在する仏人演劇関係者をボランティアの選考委員に任命してナンシー国際演劇祭にふさわしい劇団を紹介してもらおう。それに

基づき事務局内の選考委員会で検討し、決定するのだが、現地からの報告はすべて仏語なので翻訳の手間は省け、すべてがスピーディーに進行する。驚いたことに、選考委員会が作成した1975年に招くべきグループのリストに「状況劇場」と土方巽の率いる「暗黒舞踏」が記載されていた。このことは後述する。

そして1973年5月。普段は中世のたたずまいを想わせる静かなこの町は、演劇祭の始まる数日前からその様相を一変させる。街は若者であふれ、種々の言語が飛び交うなか、参加劇団の宣伝を兼ねたパフォーマンスに大きな歓声が湧く。まさしく演劇祭という「祭り」なのだ。

この年、日本からは「早稲田小劇場」(現 SCOT) が最重要劇団の一つとして招かれた。私はラング氏の意向を受けて、この劇団のパリ公演に付き添い、その後ナンシーまで同行した。そこまでケアするのは異例なことであるが、演劇祭が「早稲田小劇場」に寄せた期待の大きさを計り知ることができた。その期待にたがうことなく、白石加代子が主演した『劇的なものをめぐって』は話題を独り占めにした。会場には立ち見席が用意されたが、それでも収容しきれず、詫びを入れて帰っていただいたことを覚えている。とりわけ白石加代子の六法を踏むシーンが圧巻で、アンコールにも六法で応えていた。

演劇祭に参加した劇団のいくつかは事務局のプロデュースした別の都市で公演することができた。1972年にラング氏がパリの国立シャイヨー宮劇場総監督に任命されたのでナンシーの後はパリの国立劇場という夢のような巡業が実現したのである。

1973年の記念演劇祭も成功裏に幕を閉じて次の演劇祭の本格的準備に入った1974年の6月頃、私はラング氏から呼び出しを受けた。『一度帰国して留学生試験を受けなおしたらどうか』という話だった。ラング氏は詳細を語ろうとしなかったが、秘書によると東京のフランス大使館から私に関する事でラング氏に抗議文が届いたそうである。大使館としては「仏政府給費留学生」は唯一大使館だけが窓口であり、試験に合格した者だけが対象になるべきなのに、塩谷は別のルートで同じ待遇の留学生として採用されたのは納得がいか

ないという内容だったという。数日後私は『受けなおしてきます』と答えた。するとラング氏は『君を選考委員に任命するから候補に挙がっているグループと交渉してきなさい』。つまり旅費が出るように配慮してくださったのだ。

こうして一時帰国した私は早速状況劇場と土方巽のグループとの交渉を開始した。状況劇場からは「今のところ海外に出るつもりはない」とあっさり断られてしまった。土方巽との交渉はかなり具体的に進んだのだが、渡航費を助成してくれる国際交流基金から「土方巽の評価はまだ定まっていない」という理由で書類の受付を拒否されてしまった。「ナンシー国際演劇祭」は国庫の補助金で運営されているが、フランスに来るまでの費用は各グループの負担であるため国際交流基金に頼らざるを得なかったのである。ほかのスポンサー

は見つからなかったもので、残念ながらこの話は流れてしまった。

「暗黒舞踏」は今でこそ世界に誇る日本の舞台表現術として定着したが、1979～80年頃にフランスを中心に注目を集めたのが最初である。カルロッタ・池田や天児牛大らのグループの地道な活動が評価されたのだった。もし土方巽が1975年の演劇祭に参加していたなら、舞踏ブームはあと数年早く訪れたであろう。これまた残念な結果となった。

再挑戦した留学生試験は無事に通過し、正規の留学生として再渡仏することになった。

書きたいことの半分も表せなかったが、スペースの関係で思い出話は、これまた残念ながら、ここまでとなる。機会が許せば続編をと思っている。